

## 素描「描ける事」への一考察 (教科専門・美術工芸)

櫻井 晨正

### <概要>

本教育実践は絵画表現、特に素描(モノクローム描写)の領域に於いて展開する。教材設定には系統化されたテーマ、且つ、きわめて、基礎的で必要最小限のモチーフを用いて実技実習を行う。学生には美術教育への「小さな自信」を修得させ、将来の教師としての指導力、指導意欲の向上を目指し、充実した素描教材研究への発想の原点とすることを目標とする。

### <注> モチーフ: 描写対象

#### 1. はじめに

私達は生来、すべてに「描く」能力を与えられている事は先刻承知している。

これは、いかなる動物と比べても比較にならないほど素晴らしい感性である。

有史以前にさかのぼると、旧石器時代後期といわれるスペイン北部のアルタミラ洞窟での壁画には、日常的な自然の中の野生動物が美しく描かれていることはあまりにも有名である。

しかし、一気に現代社会に焦点を合せれば、「人」はその与えられた能力である「描く」と言う行為を生涯忘れてしまっているのか、或いは、出来なくなってしまうのか。人生に「描く」という表現が出来ない人々が多くいる事は事実である。

これは、大変憂慮されることである。この事について、大学教育の現状に目を向けてみると、小学校課程、教科専門「美術工芸」の履修学生達の中には、毎年30%~40%の者は過去の高等学校までの学校教育の中で「美術の授業」は苦手、不得手で嫌いであったと明らかにする。つまり、過去に彼等に対して何らかの美術的刺激の要因があるなしにかかわらず、美術から一定の距離を保っていた事は明白である。この事実をふまえても、卒業後、教育現場で、図画工

作指導について避けて通ることは出来ない訳で、これは「美術教育」への不安に繋がる重大なポイントになる。この講座を通して「描く事」は、それほど難しいものではない事を感じさせ、自ら、これほどに「描けた!」との小さな自信を自覚させる事を第1の目標にかかけたい。

とかく、「素描」は非創造的行為とみなされがちではあるが、描く事は、絵画表現の基本的な行為である。これを学生諸君に理解させることが重要である。

そのためには、学生諸君を少しでも美術の世界に接近させる事を目的とした課題の研究開発が必要になる。これを裏返しに言えば、大学時代に既に、美術に拒絶反応を示す様では、もう小学校課程での子供達に美術を持ち込む事は、絶望的な話になってしまうからである。

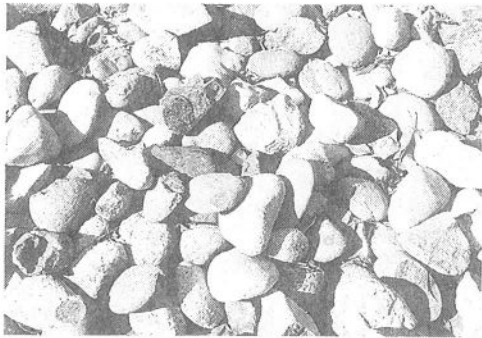
#### 2 描写題材の開発設定

題材の設定は基礎的で且つ、単純であること。また、系統的グレードの進展を有することが望ましい。なぜならば、専門の美術専門学生ならば、将来のために「発想」から「表現」に結び展開出来るに足る技法的配慮からかなり複雑で高度な描写力の育成を目的とする題材が必要ではあるが、小学校課程を目指す学生諸君に対しては、初歩的に系統立てて、技量的にも、ゆる

やかに理解度を高めていく必然性がある。それには、日常的に自然な姿として存在するモチーフを設定しなければならない。また、学生自らが美しいモチーフになるものを求めることも必要であろうし、一方では、自ら美しい形を造り、それをモチーフにすることも可能である。

加えて、科学的客観的なスケールで「対象」を捉える感性のトレーニングも必要である。以上の様なさまざまな題材について自然の中に見出すことが出来る。

例えば、美しい模様をもった動植物や道端にころがっている石ころにも大変美しい形や模様が実在する。(参考写真①) ①



美味そうに見える果物、リズムカルに重なり合った山々の稜線の美しさ等、いくらでも自然の中からモチーフを見出す事が出来る。

一方、人工的なものに目を向けてみると都市構造の美しさ、電子プリント基板のジオメトリックな美しいフォルムに目を奪われる。それらを「美しい！」と感じる「心の目」を少しでも昇華することを目的としたテーマを選びたい。

即ち、観える目を持たなければ、美しいものの価値を感じないままに通り過ぎてしまうことになる。

この観える目を見る事のみでなく、それに触れてみる事も、それを良く「知る」という事につながる。「もの」を良く観るという事は重要な「描ける事」への入口であって、描写は、よく物を見る体験的行為でもあり、小さな描ける

自信にもなる。

以上の観点から、次の様な課題を設定した。

① 18段階モノトーングラデーションを作る。

制作時間 3時間

② 各人自ら美しい紙立体を構成して描く。

制作時間 4.5時間

③ 石ころを描く。 制作時間 4.5時間

④ 2個の箱を描く。 制作時間 4.5時間

⑤ バレーボールとその箱を描く。

制作時間 4.5時間

ここで、具体的に課題の分析に入る前に本講座で使用する描写素材について述べなければならない。

この講座は、すべて鉛筆(2Bのみを使用する。この事については後で記述する。)と画用紙という身近なもので展開する。

現代社会において、シャープペンシルやボールペンなどが筆記用具として一般化してしまった社会趨勢は否定出来ないが、やはり鉛筆は日常的表現用具であることは確かである。因みに、歴史は古く14C.ルネッサンスにおいて、すでに、ミケランジェロのスケッチ画にも鉛筆(鉛と錫の合金芯)を使用していた事実がよく知られている。

それでは、なぜ描画用にシャープペンシルを使用しないのか。その理由は色々ある。その一つは、芯がかなり細い事があげられる。芯が、細いことはタッチの1本1本の密接度が希薄になり、モノトーンの諧調変化制御が大変難しくなる。また、芯が細い為に濃度の高いやわらかい芯が望めなくなる。現在のところメーカーの努力により100%炭素芯の製法に成功しており、かなりの強度が出現したが、まだまだ、描画時における筆先スピード及び明暗、濃淡変化のコントロールにおける指圧変化に耐える強度ではない。

以上の理由で授業時には一般的な黒芯鉛筆を使用する。

次に鉛筆の硬度の選択についても慎重に分析しなければならない。

一般的に美術家或いは美術専攻学生は非常に幅広く等級を選んで制作する。しかし、不慣れた学生諸君の場合は、オールマイティに使用可能な2Bが最適である。これは私が長年制作してきた結論でもあるが、これでは学生諸君への説得力がうすい。即ち、2Bの濃淡表現の範囲で高強度領域におけるデリケートな灰色着色が得られる事。反面、暗い低強度領域に於いても、なめらかに低域に進み4Bや6Bのような黒鉛質多含量の特徴であるベタ黒着色に陥る危険性もない。また、濃度を要求した時の指圧にも十分に耐えられる事も付加しておきたい。また、鉛筆を削る事に関して記述しなければならない。

最近では鉛筆削り器なるものの普及で自分で鉛筆1本削れない学生がかなりいる。

これはシャープペンシルやボールペンの普及にも関係するが、指先の運動経験が少ないだけである。

そこで毎年、この講座開講初日には必ずナイフで鉛筆削りの実習を行う。

一方、用紙について少々述べておこう。用紙は一般的な文具用画用紙でよい結果が得られる。ケント紙、アート紙の様な表面が円滑性の強い用紙は、芯の付着の悪さに加え描画する手の小指外転筋外側部分と、すでに描画された黒鉛との摩擦によって画面が汚れやすい事もあげられるため使用しないことにしている。画用紙の裏表についても製紙工程の説明も合せてしなければならない。が、本学では、意外と無頓着な学生が多い事に驚かされよう。

### 3 課題の分析

#### ① 18段階モノトーングラデーションを作る。

本講座の全課題を通してモノトーン素描である。そのために形と明暗調子の美しさを主体に置く関係上、白黒の諧調をより豊富にさせる必

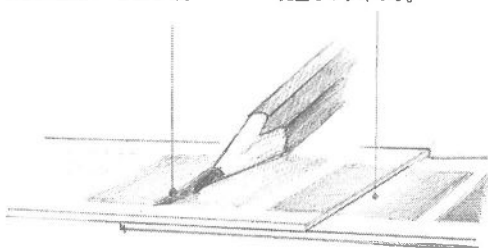
然性が生じる。また、鉛筆を持つ手首、指の機能的運動感覚の慣らしも必要になる。いわゆる、描写タッチのウォーミングアップとでも言えるこのテーマである。

制作実習は、ハツ切画用紙を長手方向に9cm巾の带状にして3等分に切りはなし各々1cmののり代を保ち接着する。約111cmの带状の画用紙になる。

その中に18個の5cm角の空白マスを設定する。その時、のり代部にマスメがかからないように配列する事が望ましい。もし、マスメの途中にのり代がくれば鉛筆の描写タッチに悪影響が発生するからである。(図1参照)

下の画用紙のつなぎ目により  
濃く鉛筆のトーンがつく。

段差によってトーンの変化が  
発生しやすくなる。



(のり代巾の広い時の弊害)

一番明るい高強度の「白」は輪郭線によって正方形を印す。その他の5cmマスメには輪郭線が必要としない。

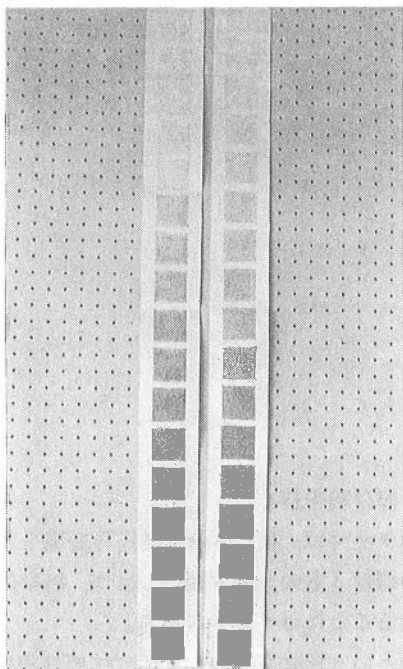
その理由は、たとえ、細い輪郭線とは言えども、マスメとマスメとの間の1cmの白い空間に対して、明度対比が生じて、隣接相互の明暗化の観測に邪魔になるからである。

マスメ数を18個にした事について。実習教室の条件に適合していること。また、四ツ切サイズの画用紙での30~40マスメ数に増設すれば、明暗対比観測に混乱を引起す結果になるからである。

制作が進み、モノトーンの諧調変化が登場する。最初は、その変化が急勾配であったり、緩やかなところであったり不揃いが目立つ。描写方法についても鉛筆を塗る者が多く、タッチを

重ねて描く様に指導する。隣接マス間の明度対比については、非常に簡単に判断出来るが、連続対比については、かなり苦勞が付きまとう。

しかし、2週目に入り、スムーズな変化に落ちついてくるが最終的に完成させる為には、指導者の助言よりも2〜3名の友人達の作品と比較検討を行えば早く正確な諧調変化に気付く。結果として、ほとんどの学生は、当初の不安とは裏腹に変化に富んだ明暗諧調表現に満足を表す。(参考写真②) ②



## ② 各人自ら美しい紙立体を構成して描く。

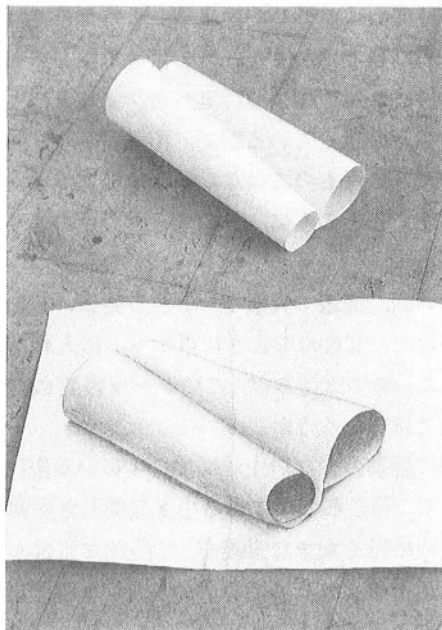
基本的に円筒形を基本にした物が多くある。例えば、樹の幹、私達の腕、脚、胴など多く目に付く。しかし、このテーマ設定の最大の理由は、前記制作したグラデーションの変化がこの白い画用紙による円筒構成見の表面に、はっきりと表われるからである。指導上の留意点として、まず構成に注目しなければならない。皺を作らず美しい曲面の作り方の助言、多様な造形の試み、刺激等が必要である。また、せっかく

美しい構成物が出来ても最も美しく見える角度からの描写についても見のがせない。

仲々、美しい形体に出逢わない学生は苦りきった雰囲気になる。これで悲観されると大変だから個別指導に進む。例えば、面について難行しているならば、その構成の視点を変えて「断面」にていて発想の転換をアドバイスする。具体的には、断面がS字型、d字型、又は、意字の2d3, 6, 8(参考写真③)などのいれことに気付かせる。すると学生からは、ひらがなの中にも考えられると言う。ひ、の、り、等である。発想の行詰まりへの打開は、常に視点、観点の変換であるとあらためて痛感する。

このテーマは簡単なものではあるが、構成練習も兼ねており、単純にd4素描だけでは終らないところの魅力ある題材である。

③



## ③ 石ころを描く。

この題材には日常、身近かなところにある自然の美しさを認識するという目標がある。本学敷地内には未整備地もあり、大小さまざまな石ころが見つかる。

学生達は、それらの石ころを自分達の美の尺度で気に入ったものを探す。その中には、自然が作った可愛い形、厳しい形状のもの、奇妙な形、美しい模様のある石ころなども多数手にすることが出来る。

各人が最初の描こうとする糸口は、やはり、描きやすさが先行している。教室に持ち帰る頃、学生達の内には、どのように描こうかと思いが高まっというはずである。なぜなら石ころを探す行為の中で描く事についての考えが同時進歩している訳で、その時点で描写構想が展開していると考えられる。

しかし、もし、気に入った石ころが見つからない学生がいれば、指導者にとって気の重い事になる。学生が、この際、単位の為に何でもよいから描けばよいと考え出すと、このテーマ設定の構想が基本的に崩れてしまう。結構、時間をかけて石ころ探しが始まる。このテーマは小さな石ころではあるが、自分自身で美しいものを見つけた思いが描写行為へとフィードバックすることを狙っている訳で、指導者から一方的に設置されたものではない。学生の主体が前面に出てくるところに、このテーマ設定のメリットがある。

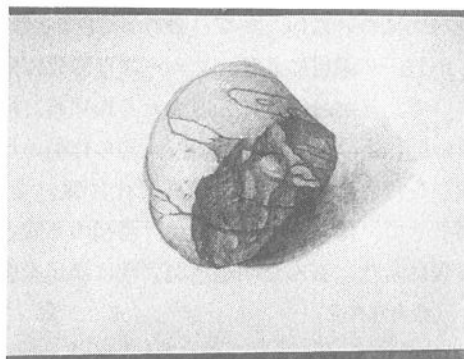
幼い頃、海辺で貝殻や、小石の美しいものを見つけて、宝ものようにポケットに入れ持ち帰った、あの気持ちが、このテーマ設定の発想の軸ではなかろうか。

特に感動の少ない生活環境の中にいる現代において、石ころの中にある小さな美しさを自分で求めに行く大きな意義を、学生達に気付かせる事が指導者の素描指導以前の大切な導入口であろうと確信する。

指導上の最大のポイントは各人自分で見つけた美しさを、いかに最大限に表現するかであって、その為には、描く角度、光の受け方、視点の上下位置の設定、また、モチーフが今回大変小さい為に画用紙の空間との関係等も特に配慮

を促す。(参考写真④⑤)

④



⑤



#### ④ 2個の箱を描く。

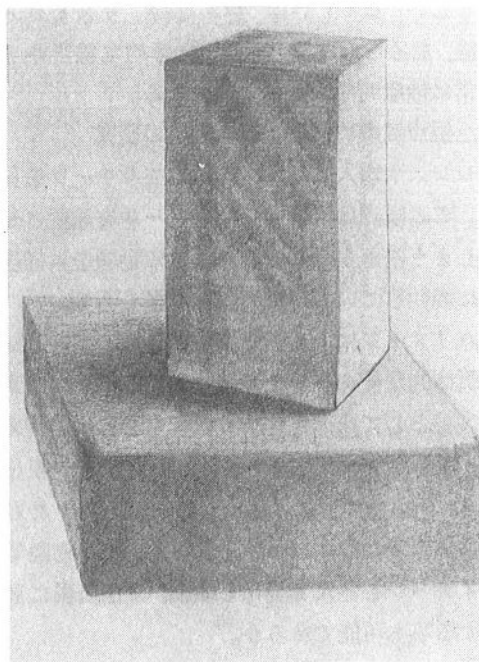
このテーマは、直方体の基礎描写表現を試みた。目標は「もの」を客観的、且つ、科学的にとらえることにポイントがある。

平面という絵画空間の中での立体感表現に関心が出てくる小学校の中・高学年の児童の成長を考えると、一度は経験しておく必要のある必須題材である。

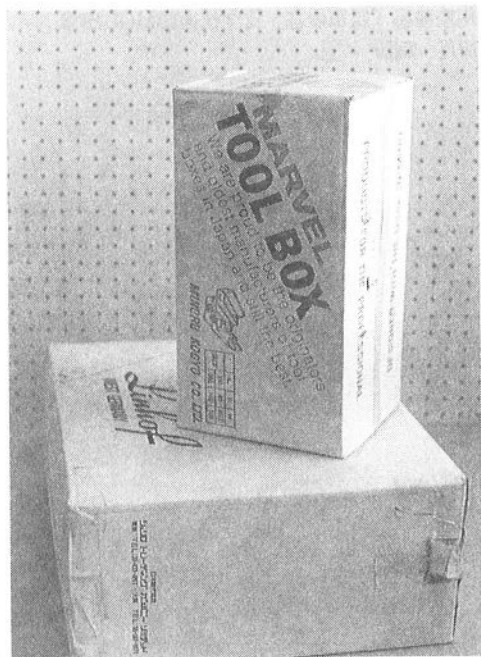
立体表現については単にパースペクティブ遠近法のみならず、色彩的遠近感などがあるが、この題材はモチーフを正確に把握し、遠近感描写につなげる指導を柱とした。

モチーフの設置に際し、特に注意する事は上下の2個の位置を振れさせることである。これは、パースペクティブの方向が多く角度に分散していく事に気付いてほしいという狙いがあ

る。また、余分ではあるが、絵画的表現上、少々役立つ理由から、印刷物のあるダンボール箱を選んだ。(参考写真⑥⑦) ⑥



⑦



このテーマにしても我々の囲りに、このような基本形体のものが、よく目にとまる。

指導上のポイントは、視点の定着に力点を置くことである。このことは、学生達の描く姿勢が常に変わるということである。モチーフを視る角度が常々変わってしまうと箱の稜線の歪みの様子が定まらない結果に陥る。

これによって最悪の場合は逆遠近描写になったり、水平描写の不具合が生じる。

すなわち、彼等の描写姿勢とモチーフとの関係で水平感が混乱している場合がよくあるからであろう。

その場合、モチーフと描き手の位置関係を単純で明確に認識しなおす必要に迫られる。加えて、一つの箱にみられる3面の明るさの相違に気付かせ、立体感表現の客観的観察眼の育成にも留意せねばならない。

#### ⑤ バレーボールとその箱(立方体)を描く。

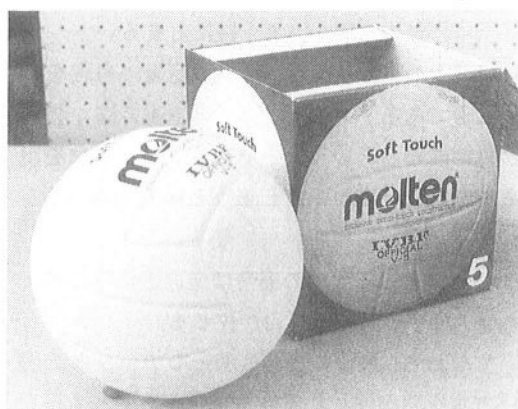
この箱の部分は前回の④のテーマと重複するが、バレーボールの量感と立方体の容量とのバランス表現に期待したい。

このような球型は日常重には、卵、人間頭部、果物等多く目につく。

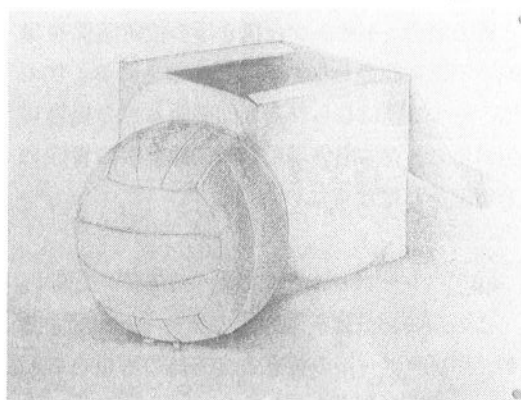
このテーマの狙いとして球型の立体表現の理解へグレードアップを図った。「球」が立体であるが故に生じる反射光線の存在の指導、陰影の変化、また、床に生じた陰との係わり、等々、球型断面図を用いて指導すれば効果的である。(参考写真⑧⑨)

学生達は前記した如く、ボールの量感と立方体の箱の容積とのバランス表現になやむ。この事は、当初から予想をしていたことである。このテーマが単体モチーフではなく異形体の複数モチーフによる、相互関係であることを把握しなければならないグレードの高い題材である。しかし、この程度の題材は、必ず将来役立つ経験として困難過ぎると思われない。

⑧



⑨



本素描実践を総括的にまとめてみれば図⑨のようになる。

図⑨で表わした上部枠内の基礎的表現の実践では、まさに初歩的で系統化された課題であると考えられる。また、その次にはグレードアップされた応用課題が経験する事が出来る。この体験は将来に向けて、美術に対する不安感を取り去り「小さな描ける自信」へと繋っていくことであろう。

#### 4. 今後の課題開発の展望

本実践論に登場した題材は非常に「基礎」を重視した為、狭義のテーマ設定に終始した。しかし、今後に向けて展望すれば、ここから多種多様な課題が開発されよう。

#### △「線」についての素描表現の研究

素描の中での重要な要素に「線」を無視することは出来ない。細い線、太い線、力強い線、弱々しい、荒々しい線、静かな線、リズムカルな線、なめらかな線、等々、具体的な線質から非常に抽象的な線質まで登場する。

#### △視点変換に関わる素描表現の研究

レンズや水入りコップを通してモチーフを見る。この視点は我々の日常スケールを激変させてしまう驚きが生じる。これらの動機を素描表現に展開していく研究の余地も多くある。

#### △イメージによる素描表現の研究

具体的なモチーフを使用せず、イメージを素描表現として具体化させる研究もあろう。例えば、簡単なマーブリング（流し墨）などの模様から、何らかの形にイメージがふくらみ、それを素描表現にむすびつける。また、詩、物語等のイメージを各人で消化した後、素描表現に展開する事も可能であろう。

#### （参考文献）

川窪隆昌「鉛筆の芯」化学技術誌MOL1982.  
10月 別冊